

日産厚生会

75 年のあゆみ

NISSAN KOHSEIKAI 75th Anniversary

公益財団法人 日産厚生会

公益財団法人日産厚生会 使命

「医の実践と研究」





公益財団法人日産厚生会のあゆみ

当会は、1948（昭和28）年に結核の予防・健診・研究を目的とする公益法人として設立された。淵源は1940年、日産コンツェルンの総帥鮎川義介氏により、傘下各社の従業員および家族の共同福利厚生施設の一環として開設された健康相談所と結核療養所である。

その後、時代の変遷に対応して生活習慣病、リハビリテーション等の予防・診療・研究ならびに介護保険法にもとづく居宅介護支援事業等も事業目的に加え、事業領域を広げ、現在は東京都と千葉県において2病院・2診療所・1介護老人保健施設・2訪問看護ステーション・1居宅介護支援事務所の運営を行っている。

2008（平成20）年の公益法人制度の抜本改革に際し、当会は「国民の健康保持と疾病の予防・治療に寄与するための医学的研究事業」を公益目標事業に掲げ、2013年12月に内閣総理大臣から「公益財団法人日産厚生会」として公益認定を取得した。





創立75周年を迎えて —公益法人日産厚生会の歴史と未来

公益財団法人日産厚生会 会長 中嶋 昭

公益財団法人日産厚生会は創立75周年を迎えることになりました。

創設から現在まで幾多の困難を乗り越え、心血を注いで当会に尽力し支えていただいた職員、関係者、またご支援いただいた地域医師会、佐倉市・世田谷区並びに関係省庁、地域住民の皆様方、そして常に温かいエールを送っていただいていた役員・理事の方々、すべての方々に深甚なる感謝を捧げます。

鮎川義介氏という稀代の実業家の篤志によって時の国民病とされた結核の研究と治療を目的とする医療機関創設が構想され、その主治医であった田川重三郎氏の努力と幅広い人脈によって実現された当会は、公益事業という命題を掲げてのスタートでありました。現新橋の日産厚生会診療所を泉源とし、遠山実氏の実行力によって本格的な結核療養所として大きく育った佐倉厚生園を核として1948年に公益法人の活動を開始し、その後、都心部の活動拠点として開設した玉川病院と玉川クリニックを加え、現在の姿に至ります。

しかし疾病構造の変化によってその医療は大きな変換を強いられました。結核医療から癌、高血圧、糖尿病などの成人病とされた疾患や高齢化社会の訪れに対応したりハビリテーション、療養期医療、また都心部における健診・予防医学への取り組みなどへと対応してきました。その機能変換期には非常な苦難を四事業所全てが経験しています。またこの時期には目的とする公益事業の実態が不明確となり、公益法人の意義と自負が揺らいだ時代だったともいえます。しかし、2015年の公益法人法の改定を機に本会の基盤を“臨床医学研究による社会的貢献”と明確にしたことによって再び時代における公益事業への力強い歩みを進めています。

節目の75周年直前の3年間は新型コロナウイルス感染症のパンデミックによって世界中が苦悩し、当会の各施設も大きなダメージを受けました。しかし怯むことなくこの感染症と対峙し医療も研究活動も継続して、公益法人としての責務を果たしてきました。

公益財団法人日産厚生会は社会貢献を専らにする“公”のマインドで、自らの責任によって最善の医療を行う“私”の覚悟をもって、日本の医療に貢献してまいり所存です。これからも公益財団法人日産厚生会を見守り、ご支援いただきますようお願い申し上げます。



創立75周年に寄せて

日産化学株式会社 特別顧問
公益財団法人日産厚生会 副理事長 宮崎 純一

日産厚生会が創立75周年を迎えられたことを心からお祝い申し上げます。

私が当会の運営にご縁を頂いたのは2011（平成23）年からですが、それ以前より、玉川病院、日産厚生会診療所で診察・検査でお世話になっていました。医学の素地がまったくない私が何かしら貢献できるとすれば、利用者目線での見方であり、専門の経理財務・企業経営からの助言だろうと思ひ、何とかここまで職責を果たすべく努力して参りました。

利用者目線で見ますと、玉川病院・診療所の素晴らしい点のひとつは、患者さんに寄り添う温かい姿勢です。先日受診待ちでソファーに座っていたところ、外来患者さんの自宅へ、看護師さんが電話で「体調が戻るまで無理して来院しないで、予約は延期して大丈夫ですよ」とやさしく話しているのが耳に入りました。あらためて通院の待ち時間の度に周りを見渡すと、方々で患者さんとスタッフの血の通ったコミュニケーションに気づきました。電子化が極まった大病院では、患者さんとスタッフが、ディスプレイを介してつながるだけに感じられるなか、極めて印象的です。

厚生会のユニークな特徴は、病院・診療所に加え、介護老人保健施設、訪問看護ステーション、居宅介護支援事業所と、幅広い事業領域で利用者の人生のさまざまなシーンを支えていることです。2013年の公益財団法人化を契機に、事業所間のシナジーも高まりつつあると感じています。また、大きな使命である臨床研究では、2014年に医学研究所が設立されたことを機に、各事業所でのさまざまな研究活動が一層活発になり、毎年開催されている医学フォーラムでは発表者の熱意が伝わってきます。

玉川病院には、引き続き厚生会の核として、今後も新棟建築計画の実現をはじめとして、大きな発展を期待しています。二子玉川地域は、近年の大規模再開発により、「住む人、働く人、訪れる人」が集まる複合的な魅力を持つユニークな街として成長し、東京の他地域に比べ、駅や商業施設の利用者も格段に増えています。玉川病院には、この発展する地元根差した病院として、街とともに一層成長していくことを願っています。

足元では、厚生会のすべての事業所は、コロナ対応に多くの経営資源を投入せざるを得ず、一般人の想像を超えた苦闘の連続であると推察いたします。しかし、歴史が示す通り、パンデミックはいつかは終息するものです。その時、厚生会は、困難な戦いの経験をエネルギーに転化させ、温めてきた未来の姿に向かって果敢にチャレンジしていくと確信しております。



創立75周年に寄せて

テクノベンチャー株式会社 代表取締役
公益財団法人日産厚生会 理事 鮎川 純太

この度の創設75周年誠にありがとうございます。謹んでお祝い申し上げます。

一言で75年と申すことは簡単ですが、日本が第二次世界大戦敗戦直後、すべてが混乱と貧困の直下にあった時期に、貴財団が設立された事実は並大抵ではないことを意味しています。

衛生状態も最悪であった当時、結核治療をはじめとする医療施設の充実は急務でありました。その意味でも医療機関として、貴財団の果たしてこられた軌跡は、わが国戦後復興と発展の歴史の一頁と申し上げても過言ではないと存じます。

直近数年間、世界は未知の病、COVID-19からの脅威に晒されることになりました。多くの医療機関が治療協力を消極的な状況のなか、貴財団は国難を克服する伝統を発揮され、極めて積極的な患者受け入れ等の活動を進めてこられたことは、地道ながらわが国現代医療機関の鑑であると申せましょう。

他方、わが国の多くの医療機関において、経済的健全性を組織的に維持しきれないところが増えつつあります。そうした状況下、貴財団におかれては、財政面においても堅実かつ健全な運営を永年にわたり続けてこられたことも特筆すべき事実ではないかと存じております。

改めて申すまでもなく、スーダン内戦やロシア・ウクライナ戦争は、もはや対岸の火事ではなくなり、東アジア各国間の関係も、あらゆる面で緊張が顕在化しつつあります。

よってわが国においても、いつ、なにごとが起きてもおかしくない時代へと突入しつつあるのではないかと存じております。

正に困難な時代にあって培ってこられた貴財団の歴史と遺伝子は、医療機関として、今後さらにその真価を発揮して行かれるものと存じ上げます。

貴財団の益々のご発展を衷心よりご祈念申し上げます。



玉川病院との長いつきあい

玉川医師会 会長 吉本 一哉

日産厚生会が創設75周年を迎えられたとのこと、喜ばしくおめでとうございます。日頃からお世話になっている玉川病院は1953（昭和28）年に結核病床を中心として開設され、現在は総合病院として地域に愛される病院として存在しています。

私が玉川病院との関係を持ったのは、今から32年前の1991（平成3）年の4月から1年間、医局の出張で消化器内科の医師として勤務したのが最初です。消化器の検査のほか、多くの患者さんを診させていただきました。その頃は今と病棟は少し異なり、少し離れたところに6病棟という結核病棟があり、そこの患者さんも診ていましたが、長期療養病棟で患者さんが生活をしており、初めて「病気療養」という概念を体験しました。今はその面影もなくなってしまいましたが、いい体験であったと感じるとともに懐かしくも感じます。玉川病院は今でも高台の奥の方に位置し、知らないところに病院があるとは判らないと思います。病院の設計は確かホテルの設計をされた方がして、エントランス中央には噴水が出る装置がありましたが、一度も使われているのは見ませんでした。外来は広くつくられており診察もゆったりさしていただき、慌ただしい感じはありませんでした。

2001年には父の跡を継いで九品仏に開業し、はや22年が経過しました。玉川病院内科には私の医局の後輩がずっと継続的に勤務されており、理事長である外科の中嶋先生とは同じ消化器で勤務時代大変お世話になりました。開業してからは「困ったときの玉川頼み」という感じで、お願いすると入院を受け入れてくださり、いつもお助けいただきました。

現在は和田義明先生が院長ですが、私と年齢は同じでいつも気さくに話してくれます。この3年は新型コロナウイルス感染症で玉川病院にはさらにお世話になりました。当初PCR検査をする場所が確保できず、世田谷区とドライブスルー式の検査をしていましたが、常設の施設を探していたときに、間借りさせてもらう形で玉川医師会PCR検査センターをつくらせていただきました。その後個別の医療機関でできるようになるまで本当に助かりました。

これからも玉川地区の中核病院として存在していくわけですが、災害拠点病院にも指定され震災や災害時には医師会と協力しながら地域住民を守って下さるようお願いいたします。今後の益々の発展を願うとともに、今後とも公私ともに長いつきあいをよろしくお願いいたします。



創立75周年に寄せて

世田谷区医師会 会長 窪田 美幸

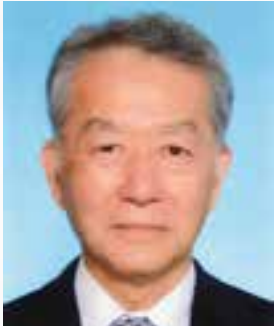
公益財団法人日産厚生会におかれましては、この度、創立75周年を迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。また、創立以来、国民の健康を第一に考えた事業を多く展開され、国民生活の健康保持と向上に貢献されておりますことに対し、深く敬意を表します。

貴会の業績は枚挙に暇がありません。世田谷での業績だけでも、1953（昭和28）年世田谷区内に開設された玉川病院では、開院当初は、結核病床を中心とした入院施設として東京都の医療体制を支えられました。現在は、二次救急病院として多数の救急患者を受け入れられている一方で、総合診療科の全人的な診療体制の設置、気胸研究センター、股関節センターやスポーツ外来などの専門性の高い医療にも力を入れておられます。また、地域医療の密接な連携については、理念として「最新最善の医療をめざし社会的貢献を果たす」を掲げ、世田谷区民を支えていらっしゃいます。

2020（令和2）年1月より新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的流行により、未曾有の事態を経験しております。全世界で約6億を超える人が感染し、約700万人の方が命を落としており、感染症において人類に対する最大の脅威となりました。日本においても、大型クルーズ船で集団感染が発生し、その患者の受け入れ対応や、専用病棟を設けての帰国者・接触者の対応に特化した診療もおこなわれ、当会運営のPCR検査施設の診療へのお力添えもいただき、改めまして感謝申し上げます。現在も玉川病院では、新型コロナウイルス診療と通常診療の両立、救急受け入れ困難な時であっても変わらず救急医療も守り続けていただき、世田谷区だけでなく、区西部・区西南部医療圏における急性期病院の役割を果たされており、重ねて感謝を申し上げます。

さて現在、医療・医学が日進月歩する一方で、未知なるウイルスの出現により、複雑化する医療への対応や我が国における医療提供体制の新たな課題と展望が顕在化しており、医療関係者のご協力と連携が、これまで以上に不可欠となっているかと思えます。今後、さまざまな状況の変化に柔軟に対応をしていくためにも、当会においても、地域医療体制に万全を期すとともに、健康保持増進に尽力して参る所存でございます。貴会にも、是非、お力添えいただけますと幸甚に存じます。

日産厚生会の益々のご発展と皆様の弥栄を祈念申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。



佐倉厚生園の思い出

印旛市郡医師会 会長 菅谷 義範

日産厚生会創設75周年おめでとう御座います。

また、佐倉厚生園病院様には日頃より印旛市郡医師会の活動に御理解と御協力を頂き有難う御座います。加えて地域の中核病院として御尽力頂き感謝申し上げます。

私は、生まれが佐倉ですので、2014（平成26）年に佐倉厚生園が佐倉厚生園病院に名称変更されてからも、子どものころからの佐倉厚生園という呼び方を今でもしてしまうことがあります。佐倉厚生園が1942（昭和17）年の開園ですので、佐倉厚生園病院は佐倉厚生園から数えて80年を超えて地域の医療を支えて頂いています。2011年まで、結核の治療と予防を担って頂いていたので、結核療養所の印象が強かったのですが、その後現在の体制を取られて、内科疾患を中心とした診療とリハビリテーションにも力を入れていらっしゃいますので、ますます充実した病院として地域医療に貢献して頂いています。現在、新しい建物になっていますが、以前の病院と同じように正門から病院までのアプローチには落ち着いた佇まいがあり、春には桜もきれいで、緑の多い環境の中で療養には最適の病院と思っています。2009年の結核病棟の廃止は残念でしたが、疾病構造の変化で結核が減少したこともあり止むを得ないことと思っています。

現在、病院に隣接する旧堀田家住宅と旧堀田正倫庭園は、国の重要文化財と名勝に指定されています。以前は住宅・庭園共に厚生園で管理されていて、住宅には入れませんでしたが、庭園には自由に入ることが出来ましたので高校生頃までは時々遊びに行っていました。借景を取り入れた美しい庭園で、松の配置や手入れの行き届いた広い芝生が素晴らしく、ゆっくりした時間を過ごした思い出があります。友人が遊びに来た時にも案内して、美しい庭園を見てもらいました。

現在、名誉院長をされていらっしゃる遠山先生は、小学校と高校での先輩で私の開業当初から印旛市郡医師会でお世話になり、私が医師会の理事を担当させて頂いてからも御指導を頂いていました。また、院長の長尾先生とは、東邦大学医療センター佐倉病院の院長をされていらっしゃった時からのお付き合いで現在医師会の監事をお願いしています。お二人と御一緒に仕事をさせて頂いているのも大切なご縁ですので、このこともあり、佐倉厚生園病院は身近な存在となっています。

今後も、地域医療を支えて頂き、合わせて素晴らしい環境の保全にも引き続き力を入れて頂きたいと思っております。

結びに、日産厚生会様並びに佐倉厚生園病院様の益々のご発展をお祈り申し上げます。



創立75周年に寄せて

世田谷区長 保坂 展人

本年、公益財団法人日産厚生会が創立75周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

貴会におかれましては、1948（昭和23）年、当時の国民病とも呼ばれた結核の撲滅を目的とする財団法人として創立されたと伺っております。戦後、時代が大きく変動した昭和から、平成の時代を経て、令和の新時代に至るまでの長きにわたり、疾病の予防・治療に寄与するための臨床医学の研究に取り組み、大きな成果を上げてこられました。また、時代の変遷に伴い、保健医療福祉を取り巻く環境が大きく変化するなかで、公益の財団として安定した医療・介護等の提供に取り組まれていることに、心より深く敬意を表します。

さて、当時、結核患者の入院施設拡充が社会的急務であったことを背景に、1953年、世田谷区瀬田に、結核病床を中心とする210床の病院として日産厚生会玉川病院が開設されました。以来今日までの間、貴院には地域の医療・福祉の推進に多大なるご尽力を賜っております。

現在、玉川病院におかれましては、東京都の二次救急医療機関として、年間4,000台以上の救急車を受け入れていただいております。急性期から、病気が安定し改善していく回復期に至るまでの地域医療を支えていただいております。

また、今般のコロナ禍におきましては、新型コロナウイルス感染症診療と通常診療を両立し、発熱外来の設置はもとより、新型コロナウイルス感染症入院重点医療機関として患者の治療に携われるなど、現場の最前線で、日々、多大なるご尽力をいただき、地域の医療提供体制の確保に大きな役割を果たしていただいております。この場をお借りして、改めて深く感謝申し上げます。

世田谷区では、誰もが住み慣れた地域で、支えあい、安心して暮らせる地域社会の実現に向けて、地域包括ケアシステムの更なる充実に取り組んでいるところです。今後の高齢社会の到来や家族形態の変化等に加え、新型コロナウイルス感染症の流行に伴う生活様式の変化等により、医療や福祉をめぐるニーズや課題は多様化・複雑化してきております。

貴院におかれましては、引き続き、地域に根ざした総合病院として、世田谷区の地域医療を支える役割を果たしていただけるよう、格別のご支援、ご協力を賜りますよう、重ねてお願い申し上げます。

結びに、このたびの公益財団法人日産厚生会創立75周年を契機として、貴会の益々のご発展と、関係者皆様方のご健勝とご活躍を祈念いたしまして、お祝いのご挨拶といたします。



創立75周年に寄せて

佐倉市長 西田 三十五

このたび、公益財団法人日産厚生会が創立75周年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

貴会は、1948（昭和23）年に結核の予防・診療・研究を目的とし創立、現在では生活習慣病を中心とした慢性疾患病院としての活動や介護保険法にもとづく介護保健施設や訪問看護ステーション、居宅介護支援サービスなど包括的な医療体制を形成され、私ども佐倉市におきましても地域医療の発展に寄与されるとともに住民福祉の向上に多大なるご貢献を賜っておりますことに、厚く御礼申し上げます。

また、長年にわたり地域医療を支えてこられた中嶋昭会長をはじめ、歴代の病院長、並びに関係者の皆様方のご功績に対して、深く敬意と謝意を表する次第でございます。

さて、近年、新型コロナウイルス感染症は、医療現場等に多大な影響を与え、地域医療を取り巻く環境は厳しい状況下でございます。

今後につきましても、高齢化の進展とともに地域医療へのニーズも大きく変化し、時代の変遷に対応した、医療や介護などの需要がますます増加していくと予測されます。

こうしたなか、貴会の疾病の予防と治癒に関する臨床医学の研究を使命とし、その研究成果を日々の医療・介護支援活動に反映させ、最善の医療の実践を理念とした活動は、大変心強く、貴会の果たす役割は、国民の安心感の醸成につながるものと大いに期待しております。

佐倉市では、子どもから大人まで、すべての市民が主体的に健康づくりに取り組み、いつでもいきいきと生活できる「健康のまち佐倉」の実現を目指しております。各種健診（検診）や予防接種、保健指導などの保健事業の充実、また、市民が病気やけがをしたときにも安心して医療を受けることができるよう地域医療体制のさらなる充実のため各種施策の推進に、「オール佐倉」で取り組んでまいりますので、引き続きのお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

結びに、公益財団法人日産厚生会が創立75周年を契機として一層のご発展を遂げられるとともに、関係者の皆様のご健勝を心から祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

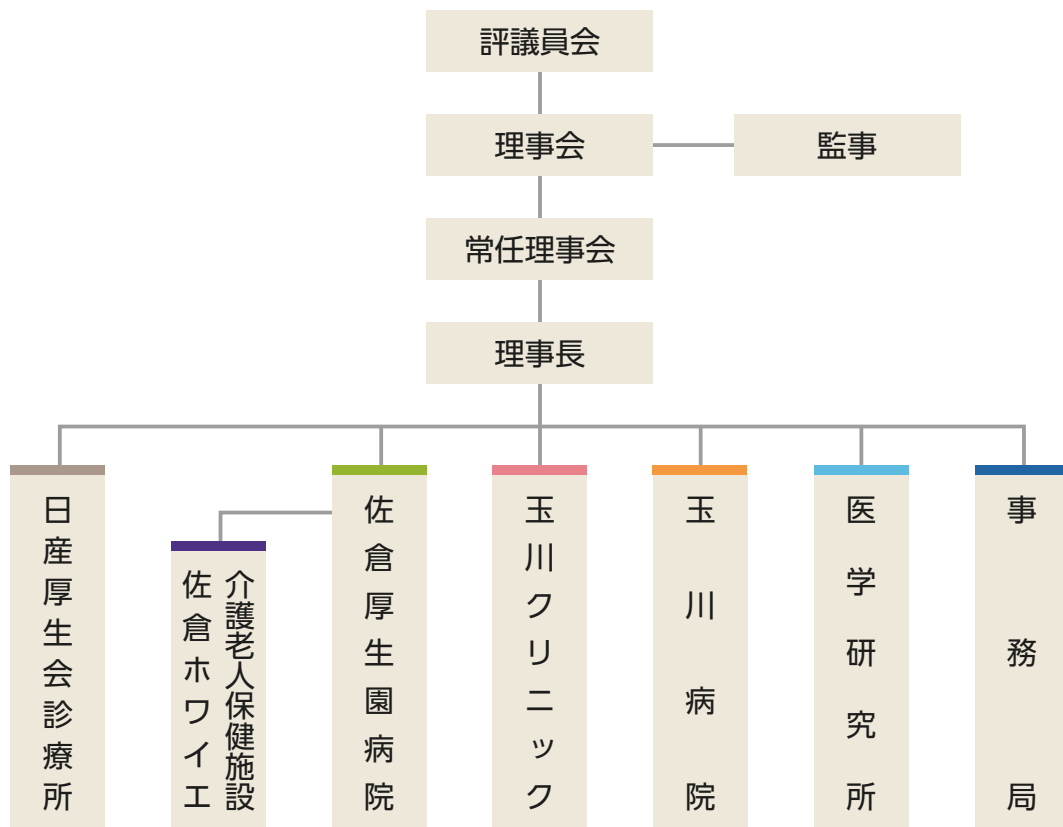
公益財団法人日産厚生会 評議員および理事・監事名簿

● 評議員 (2023年6月15日現在)

氏名 (五十音順)	職業等
内田 幸雄	ENEOS ホールディングス株式会社 特別理事
片岡 寛	一橋大学 名誉教授
栗原 裕基	東京大学大学院医学系研究科 教授
高橋 忠生	日産自動車株式会社 元副会長
田川 丈二	日産自動車株式会社 専務執行役員
松村 太郎	まつむら綜合法律事務所 弁護士
村上 保夫	公益財団法人榊原記念財団附属榊原記念病院 顧問
山口 武兼	地方独立行政法人東京都立病院機構 理事長特別補佐
吉田 友英	東邦大学医療センター佐倉病院 病院長

● 理事・監事 (2023年6月15日現在)

役付	氏名	担当業務 [括弧内は職業等]
会長	中嶋 昭	玉川病院 名誉院長
理事長	和田 義明	玉川病院 院長
副理事長 (非常勤)	宮崎 純一	[日産化学株式会社 特別顧問]
副理事長	長尾 建樹	佐倉厚生園病院 院長
常任理事	川村 徹	日産厚生会診療所 所長
常任理事	長 晃平	玉川クリニック 所長
常任理事	松原 正明	医学研究所 所長 (兼) 関節疾患研究部門長 玉川病院 副院長 (兼) 股関節センター長
理事 (非常勤)	鮎川 純太	[テクノベンチャー株式会社 代表取締役]
理事 (非常勤)	的埜 明世	[株式会社ニッスイ Executive Advisor]
監事 (非常勤)	宮坂 敬尊	[公益財団法人エイズ予防財団 元理事]
監事 (非常勤)	荒井 啓隆	[損害保険ジャパン株式会社 顧問]



- **玉川病院**
 - 院長 和田 義明
 - 所在地 〒158-0095 東京都世田谷区瀬田4-8-1
 - H P <https://www.tamagawa-hosp.jp>
- **玉川クリニック**
 - 所長 長 晃平
 - 所在地 〒158-0094 東京都世田谷区玉川3-15-17 玉川高島屋S・C西館1F
 - H P <https://tamagawa-clinic.jp>
- **佐倉厚生園病院**
 - 院長 長尾 建樹
 - 所在地 〒285-0025 千葉県佐倉市鎗木町320
 - H P <https://www.sakurakouseien.jp>
- **介護老人保健施設
佐倉ホワイエ**
 - 施設長 遠山 正博
 - 所在地 〒285-0025 千葉県佐倉市鎗木町336
 - H P <https://www.sakurakouseien.jp/foyer/>
- **日産厚生会診療所**
 - 所長 川村 徹
 - 所在地 〒105-0003 東京都港区西新橋1-2-9 日比谷セントラルビル2F
 - H P <https://www.nissan-clinic.or.jp>
- **医学研究所**
 - 所長 松原 正明
 - 所在地 〒158-0095 東京都世田谷区瀬田4-8-1
 - H P <http://institute.nissan-kohseikai.jp>
- **日産厚生会事務局**
 - 所在地 〒158-0095 東京都世田谷区瀬田4-8-1
 - H P <https://www.nissan-kohseikai.jp>

公益財団法人日産厚生会 使命	2
公益財団法人日産厚生会のあゆみ	3

発刊のあいさつ

公益財団法人日産厚生会 会長 中嶋 昭	4
---------------------	---

祝 辞

日産化学株式会社 特別顧問 公益財団法人日産厚生会 副理事長 宮崎 純一	5
テクノベンチャー株式会社 代表取締役 公益財団法人日産厚生会 理事 鮎川 純太	6
玉川医師会 会長 吉本 一哉	7
世田谷区医師会 会長 窪田 美幸	8
印旛市郡医師会 会長 菅谷 義範	9
世田谷区長 保坂 展人	10
佐倉市長 西田 三十五	11

公益財団法人日産厚生会 評議員および理事・監事名簿	12
組織図	13

沿革編

第1章 前 史 (1940 ▶ 1947)	18
第2章 創設期 (1948 ▶ 1957)	23
第3章 拡充期 (1958 ▶ 1984)	30
第4章 転換期 (1985 ▶ 2012)	42
第5章 充実期 (2013 ▶ 2022)	65

TOP INTERVIEW

「公益」を追求しようと始まった財団法人日産厚生会の歴史

公益財団法人 日産厚生会 会長 中嶋 昭

施設紹介

● 玉川病院 概要と取り組み	88
最善・最新の治療を目指す二子玉川の病院 玉川病院 院長 和田 義明	89
● 玉川クリニック 概要と取り組み	90
日産厚生会75周年によせて 玉川クリニック 所長 長 晃平	91

● 佐倉厚生園病院 概要と取り組み	92
佐倉厚生園の現況と展望	
佐倉厚生園病院 院長 長尾 建樹	93
● 佐倉ホワイエ 概要と取り組み	94
介護老人保健施設佐倉ホワイエの歩むべき道	
介護老人保健施設佐倉ホワイエ 施設長 遠山 正博	95
● 日産厚生会診療所 概要と取り組み	96
伝統の地域とともに信頼される良質の医療を	
日産厚生会診療所 所長 川村 徹	97
● 医学研究所 概要と取り組み	98
日産厚生会における今後の25年	
医学研究所 前所長 栗原 正利	99
職員研修発表会開催実績	100
医学フォーラム開催実績	102
資料編	103
現行定款	104
歴代理事・監事任期一覧	110
歴代評議員任期一覧	114
歴代施設長任期一覧	115
患者数・職員数推移	
● 玉川病院	116
● 玉川クリニック	117
● 佐倉厚生園病院	118
● 佐倉ホワイエ	119
● 日産厚生会診療所	120
日産厚生会研究業績	
● 玉川病院	121
● 玉川クリニック	135
● 佐倉厚生園病院	136
● 佐倉ホワイエ	137
● 日産厚生会診療所	137
巻末年表	139

凡 例

- 本書の記述は、原則として2023（令和5）年6月までとした。
- 用字用語は、常用漢字、現代かなづかいによったが、慣用語、専門用語などには、これによらないものもある。
- 会社、団体名は当時の名称を用いた。また法人格については、原則として初出時に記載し、再出以降は省略した。
- 年の表記は原則として西暦を使用し、適宜、和暦を併記した。
- 役職名は当時のものを使用した。
- 数字は算用数字を用い、必要に応じて、億、万の単位を補った。

沿革編



第1章

前史

1940▶1947 (昭和15年~昭和22年)

太平洋戦争より前、わが国では結核が蔓延、多くの人命が失われ「亡国病」と恐れられた。こうした状況を憂えた実業家・鮎川義介は、結核の撲滅に向け、早期に結核を発見するための日産健康相談所を設立した。今日の公益財団法人日産厚生会の源流である。



日産コンツェルンの本拠が置かれた日産館。日産健康相談所は日産グループ各社の厚生課事業を行うために設立された



鮎川義介。日産コンツェルンの創始者であり、政治家としては貴族院議員、参議院議員も歴任した

日産健康相談所の開設

当財団の発祥は1940（昭和15）年まで遡る。同年9月1日、現在の日産厚生会診療所の前身にあたる日産健康相談所が誕生した。戦前日本の産業史に名を残す大実業家・鮎川義介の深慮に基づくものだった。鮎川は日本の優秀な若者が結核で前途を絶たれることを心底嘆き、民間企業であっても打てる手はないかと模索していたのである。

鮎川は1928年、日立鉱山を中心に発展を遂げた久原鉱業株式会社の社長に就任。会社を持株会社に変更し、社名を日本産業株式会社に改めた。通称「日産」と呼び、以後、新事業分野への進出を重ねて日産コンツェルンを形成し、戦前の「十五大財閥」の1つに数えられるまでになっていく。1937年時点、日産傘下の企業には日本鉱業、日立製作所、日産自動車などがあった。

その一方で、国内グループ各社間の結束を固める観点から、営利事業を行いながら各社の福利厚生などの公益的な事業を集約

して運営する「株式会社日産」を1938年に設立した。同社の厚生課事業として開設されたのが、日産健康相談所である。

当初の開設場所は東京・麴町区内幸町（現・千代田区内幸町）の防長クラブ内だったが、1941年7月に同じく内幸町の放送會館の裏手に位置する日産館第二分室（2階建）に移転。丸の内や新橋に近いオフィス街で、建物の1階は柔道場、2階には日産健康相談所のほかに結婚相談所が入っていた。

初代所長には東京帝国大学（現・東京大学）第一内科医師の高橋忠雄が就任し、担当役員は、日産の理事であった島本徳三郎であった。これは、日本銀行が健康相談所（X線装置付）を設けたところ、非常に評判が良いのを聞き、島本が鮎川に進言し開設の運びになったものである。以後、日産健康相談所は、結核の早期発見を主目的として、会員会社の従業員・家族の一般診療、健康診断等を行うことになる。

1942年、株式会社日産から公益部門が独立、鮎川を会長とする「社団法人日産会」



財団法人日産厚生会初代理事長を務めた田川重三郎。堀田邸を鮎川総裁に紹介した

が設立された。その後、戦時体制の急速な進展に伴って、公益部門のうち診療関連事業は国策に従い「日産厚生報国会」と呼称された。日産健康相談所の運営もまた日産会へ移管されることになったが、結核撲滅への関係者の志は揺るぎなく保たれた。

当時、日本国内では結核が蔓延し、その死亡率は極めて高かった。1935年から1943年までの間、1年を除いてわが国の死因順位の首位に座り続け、「亡国病」と恐れられていた。その対策には早期発見と静養が必要だった。結核の治療法は、1944年に米国で特効薬の抗生物質ストレプトマイシンが発見されるまでこれといったものがなく、栄養管理と生活改善を主とする隔離入院くらいしか対処法がなかったのである。

日産健康相談所を開設後、早速、鮎川、田川重三郎（東京帝国大学物療内科講師）、高橋忠雄（日産健康相談所所長）、遠山実（東京帝国大学物療内科医局員）らが相談し合い、健康相談所で見つかった軽症結核患者を隔離療養するという連携施設の設置に乗

り出した。それほどに結核の蔓延に対する鮎川の憂慮は深く、志を同じくする3人の医師も協力を惜しまなかった。特に田川は入所施設開設へ向けて心血を注いだ。

佐倉日産厚生園の開設

目指したのは、集団検診や個別診療で発見された初期の結核患者を収容して加療するとともに、生活指導を行って職場復帰を果たさせる施設であった。鮎川はその開設・運営のため、日産に積み立てた資金を充てることに決め、田川・遠山とともに候補地をいくつか検討していった。

初め小田原近郊に計画をしていたが、軍需産業への資材優先政策のため資材の入手が困難で中止となる。このため新設は諦め、既設建築物を利用しての療養所候補地の物色に取り掛かることになる。

そのなかで白羽の矢が立ったのは、田川の仲介による千葉県佐倉町（現・佐倉市）の堀田伯爵邸（佐倉藩主・堀田氏の旧別邸）だった。1890年代に造られた国内屈指の



現在の旧堀田邸。邸宅(旧堀田家住宅)は国の重要文化財、庭園(旧堀田正倫庭園)は国の名勝に指定される(佐倉市教育委員会提供)

洋風庭園が面影を残し、環境と広さは申し分がなかった。1942(昭和17)年春、日産と堀田家との間で賃貸契約が交わされ、約3万3,000坪の土地と堀田家の建物を借り受けた。養蚕のために立ち並んでいた2階建て家屋群は、病棟への転用が容易だった。

建物の改造、庭園の修復・拡張などを経て、同年9月1日、「佐倉日産厚生園(現・

佐倉厚生園病院)」が開園した。収容定員60名。軽症の結核患者を入園させるという原則だったため、長期的な療養を行う「サナトリウム」に対応して「プレベントリウム」と自ら名乗ることとした。

スタッフは佐倉日産厚生園理事長・島本徳三郎、同会顧問・田川重三郎、園長・増田秀吉、副園長兼診療所長・遠山実以下20名であった。医師の人数は十分でなかつ



1955(昭和30)年頃に空から撮影された佐倉厚生園



佐倉厚生園初代病院長を務めた遠山実。近代的療養施設を次々と増床、草創期の繁栄をもたらした

たため、田川が週に何回か東京から通勤し、ほどなく東京帝国大学物療内科医局からの応援を仰いだ。

1944年、1945年と戦局が急迫するなか、佐倉日産厚生園は(財)商工協会(軍需省の外郭団体)と共同で100床の新病棟建設を推し進めた。この間、遠山が軍隊に召集され、島本が終戦と同時に理事長職を辞するといった出来事も相次いだが、建築工事は順調に進み、終戦直後の1945年11月に完成を見た。これにより本館100床、旧館60床という体制を整えたのである。

しかしながら、経営的には安穩としていられなかった。日産会の資金欠乏が深刻さを増していたため、本館完成の翌月末、独立採算・自治運営を申し渡されたのである。当時の入園料は患者の所属会社が負担するという方式をとっていたが、それだけでは経営が難しくなったため、健康保険も取り扱うこととし、日産グループ企業関係者に限らず一般からの患者も受け入れることとした。

このようにして園内の診療所を一般向け

病院としても整えると、1946年4月、病院としての開設の許可が下りた。それと同時に、名称も佐倉日産厚生園から「佐倉厚生園」と変更。遠山実が第5代園長に就任した(病院長としては初代)。

なお、日産健康相談所は、1944年7月に日産館が海軍の使用に供されるため、日本橋の白木屋に移転するが、1945年3月10日の東京大空襲により施設、機材の一切を焼失する。

その後、事業再開に務め、東京小石川の田川私邸に仮相談所を設けるが、開設後数日にして再び空襲により罹災する。その後、丸の内の中央ビルに移転することになるが、ここも占領軍に接收され1946年10月に日産館7階に移転することとなる。

なお、終戦後、日産会は、占領軍による財閥解体政策に対応し、1946年2月に名称を「社団法人昱生会」と改めており、それに伴い、日産健康相談所も対象を日産グループ企業関係者に限定せず、広く一般に開放することとして、「昱生診療所」と改称している。